この趣海坊、とにもかくにも、やる気がない。
ほんとに、まったく、あったためしもありません。
齢だけでいえば、いまごろ大天狗と呼ばれてもおかしくないくらいには長生きしているのですが、なにぶん修行を面倒くさがって、身分はいつまでたっても小天狗のまま。
これは、もう大学を卒業してもいい年ごろなのに、いまだに小学一年生を続けているようなものです。
天狗のつとめは木々の病を治して、お山を守ること。つとめを果たしてこそ、酒がうまいし宴が楽しい。
けれど、趣海坊の棲むお山の木々はあちこち枯れて荒れ放題、木に病があればほかの山に棲む天狗たちがこぞってやってきて、当の趣海坊はいびきをかいて寝ているという、ひどいありさま。
ついに堪忍袋の緒が切れた大天狗たちは趣海坊をとっ捕まえて、みんなの前に引きずり出したのです。
「おう、趣海坊よ」と、この中で一番偉い、金毘羅天狗がすごんでみせました。
金毘羅天狗は、もともと人の子だった天狗です。
天狗には二種類あって、生まれついての天狗と、元人間の天狗がいました。といってもふたつに区別はなく、いちど天狗になってしまえばあとは修行次第で、元人間の天狗も立派な大天狗になれるのです。ちなみに趣海坊は、人の世を知らない、生粋の天狗でした。

さて、この金毘羅天狗と趣海坊には、ほとんど同じだけの力があったのですが、怠け者の趣海坊はこの大天狗の眷属に甘んじていました。金毘羅天狗にしてみれば、なんとも扱いにくい、同い年の部下がいるようなものです。
「おぬしは、いつになったら天狗として恥ずかしくない男になるのだ？　お山を守り、子らに修行を伝えて立派な天狗として生きるのが、我らのならわし。だのにおぬしはのんびりまったりくだを巻き、おのれの棲む木にゴロゴロ寝ころび酒びたり。我ら真面目に生きる者たちを、アホを見る目で見物している。だが、いいか、おぬしは我らを生真面目なアホと思っている。だが、いいか、おぬしは我らを生真面目なアホと思っているかもしれんが、我らはおぬしをアホの中のアホと思っているぞ」
他の天狗よりもいっちゃん背の低い趣海坊、よその天狗から見下されるのには慣れています。じつにくだらなそうにあくびをかき、着崩した小袖の下でぽりぽりと腹をかいて、金毘羅天狗にへらりと笑ってみせました。
「まあ、そう青筋を立てるない。なにか勘違いをしているようだが、おれは別に、誰にも迷惑はかけちゃいない。酔って騒ぎを起こしたことはなし、真面目なあんたらにちょっかいを出すでなし、人の子のように、金の無心をするでなし。ただ、天狗の世界はわりと暇すぎるのがいけない。お山を守ること以外、おれたちにゃ何がある？　体は丈夫で病とは無縁、五穀を食わぬから汗水たらして野を耕すこ